占星術と天文學との關係，その歴史

Astrology and Astronomy, their History.

吉岡修一郎 *Syuitiro Yosioka.*

1.

科學のどの部門においても，その起源は普通，迷信から離れてゐない．それで，科學の起源は迷信であるといふ說を立てる人もあるが 私はさうは思はない．科學の起源においては．科學的な思考と迷信的な思考とがまだ分化してゐないのであつて，兩者がとけ合ひ絡み合つてゐるのだと思ふ．迷信から科學が生れるのではなく，兩者の共通の源泉である所の渾然とした人間思考形態の中から，この兩者が次第に發生して來たのだ．ちやうど，人類が猿から進化したのではなくて，人と猿との或る共通の先祖から，この二つが生れ出た，といふのと同樣だらう．

このやうな事情を，數學と數の神秘說（ピタゴラス派の神秘說や支那の陰陽，八卦，またインドの聖數など）との關係に見ることが出來るし，また天文學と占星術との間にも見ることが出來る．この天文と占星とは兄弟分なのだから，後になつても，天文學には始終占星術がつきまとつて來た．もともと，この兩者は起源において分化してゐなかつたのが，科學史の事實なのだから，兩者が一應分化した後にも折にふれて屢々手をつなぎ合ひ，また或る個人々々の思考の中では近代になつても兩者未分化の狀態が現れてゐる場合も多いのは當然のことだらう．

迷信と科學との相違は，必ずしもはっきりしてゐるとは限らない．迷信には論理がないと考へてゐる人が多いが，それは間違ひで，迷信には迷信としてのまとまつた論理の體系がある．形式的にはちやんと辻つまが合つてゐて，矛盾がない．どんな迷信家でも，その狹い迷信の範圍內だけでは，論理の法則に適つた考へ方をやつてのけてゐる．およそ人間がものを考へる場合，論理を無視するといふことはあり得ない．たゞ迷信と科學との違ふ點は，科學が物事自體を觀察し歸納するに當つて，廣く且つ冷靜に見，そして先入見を拋棄する心構へがいつでも出來てゐる，といふ點にある．先入見を無理に固守するには，いろいろの原因があつて，感情的または打算的熱中とか理論的安易とか面子問題（體面）とか，その他種々だらうが，いづれにしても，それは或る觀念に固執して，そのために現實の事態を犧牲にすることだ．だから當然，冷靜公正な現實

觀察が妨げられる結果になる．そして，この先入見をいつでも捨て得る心構へにもいろいろ程度の差があるから，科學的精神にもやはり程度の差があり，迷信と科學との間にいろいろの中間の段階や混和の狀態があり得る．

かういつた點でも，占星術と天文學との關係の歴史は一つのいゝ實例を提供してゐると思ふ．

私自身西洋の占星術の歴史を，直接の史料によつて研究してはゐないので，西洋人の書いたものに賴つて，その歴史のいくらか詳しい紹介をこゝで陳べるにすぎない．從つて，なかに引用される史料なども直接見てはゐないが，しかし，これは充分信用していゝ筋のものであることを，斷つておきたい．

2.

占星術は現在，全然『占ひ』としての一つの精巧な體系であつて，天文學とは完全に離れてゐる．しかし，このことは，現在の科學者においてさうなのであつて，一般人や占星術專門家にとつては必ずしもさうではない．それぱかりでなく，占星術の專門家は占星術をも一つの『科學』として認めようとする．そこにも既に迷信たる特徴がある．

所で，天文學の歴史の初期においては，第一に，觀察の精密といふことが技術的に進んでゐないために，天文學者の知識には想像の要素が多かつた．だが，それよりも重要なことには，初期の天文學者は哲學者から分化してゐないので，而も，さういふ哲學者が觀念論者だつたために，現實の觀察の精密さ，廣汎さ，冷靜さといふことが缺けてゐたのだつた．それで，星の運行を人生の諸事に結びつけて，運勢判斷と關係づけて考へるのは，彼らにとつて極めて自然の傾向だつた．それは未開時代の考へ方を保持したもので，近代的科學の考へ方とは違つたものだつた．

太陽が地球上の生命に及ぼす効果の根本的なことは，どんな未開人にでも明瞭だつたし，月のみちかけと人生との關係も明かだつた．そこで，他の恒星や遊星も太陽や月のやうに大きな影響力を人事百般に及ぼすに違ひないと考へるのが，未開人風の頭にとつて當然の考へ方だつた．殊に，月の輝きの獨特な調子や，そのみちかけ，遊星の運動の奇怪な變動性と個有性とは，古代人や未開人の想像力を刺戟せずにはゐなかつた．地球の自轉のために，太陽系外の凡ての恒星は（吾々の眼から見て）北極星を中心にして毎日規則正しい團體運動を見せてゐるが，それに反して，太陽系内の天體卽ち太陽，月，遊星の凡ては，凡ての(太陽以外の)恒星の團體運動から離れた別種の運動，而も各自が別々の運動を見せてゐる．特にそのうちでも，遊星の運動は，獨特の奇怪さを示す．それらは，人間の運命の測りがたい偶發性や盛衰のはかなさ，又それらを支配す

る善靈惡靈の雜多を聯想させずにはおかなかつた．このことは，古代人が遊星を名づけたその名稱の由來を見てもよくうかがはれる．例へば，遊星の中でも特に堂々たる統領である木星をジュピター卽ちユピテル（ゼウス神）と名づけて，ギリシャ神話の主神ゼウスに見立て，また特に光のあでやかな金星を女神ヴィーナス卽ちウェヌスと名づけ，血のやうな光の火星には軍神マルスの名を借り，靑い土星にサターン卽ちサツルヌスを結びつけるといふやうに，一々ギリシャ神話の神々の個性を與へてゐる．

こゝに，占星術的思想の起る明かな芽生えがあるのであつて，それは凡ての人類の幼稚な思索にとつて必然的なものだ．いはゆる『占星術』の名稱は，Astrology (die Astrologie) といふ風になつてゐて，この方が却つて Astronomy (die Astronomie) よりも『星の學問』らしい感じを與へるが，それほどに，古代人にとつては占星術が『學問』であり，哲學であつたわけだらう．

3.

占星術の基礎は，まづ上のやうな諸星と，いはゆる獸帶との關係にある．この關係は勿論，太陽中心ではなくて，地球中心的に考へられた．地球上の人間の眼に映ずるまゝの天體運動を考へるのだから，地球中心になるのが當然なわけだつた．（現代の天文學者にしても，特に恒星の觀測に當つては地動說だけでなくこの自己中心の考へもなくては整理がつかない．）そこで，地球の自轉のために，吾々の眼から見ると，太陽が每日一回づつ地球のまはりを東から西へ廻るやうに見えるが，それと同樣に，地球の公轉のために，吾々から見て太陽が每年一回づつ天球を一まはりするやうに見える．この天球における太陽の一年間の運動が一つの大圓になつてゐて，それが昔から黃道と名づけられてゐる．だから，黃道は全恒星界に對して相對的な一つの通路で，それが卽ち，いはゆる十二宮の獸帶を次々と通つてゐる．また，太陽と一緖に，太陽系內の遊星や月もやはりこの獸帶の中を運行する．（現在の太陽中心說の言葉に飜譯して言へば，黃道は要するに，地球公轉の軌道が天球に投影されたものに他ならない．）占星術はこの獸帶に基礎を置いてゐる．

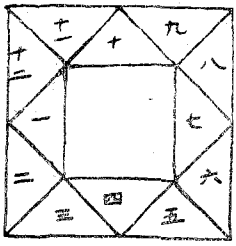
獸帶は一まはりで360度あるから，それを30度づつに切れば十二になる．それを十二の『宮』(Sign, das Zeichen) と言つて，その各々の名前が大體生きものの名をとつてあることは周知の通りだ．そのいはれは，その宮に當る星座の性質や姿がその生きものの性質や姿に似てゐるといふことにある．その名前を一應擧げておけば：　1. アリエス（牡羊），2. タウルス（牡牛），3. ゲミニ（双兒），4. カンケル（蟹），5. レオ（獅子），6. ウィルゴ（處女），リブラ（天秤），8. スコルピオ（蠍），9. サギッタリウス（射手），10. カプリコルヌス（山羊），

11. アクァリウス（水瓶），12. ピスケス（魚）．但し，これらの名にちなむ星座が平等に30度づつを占めてゐるのではなく，かなり不同がある．大體さうなつてゐるといふに過ぎない*．又，それさへも，二十二世紀以前には成り立つてゐたが，現在では，この星座と十二の宮との一致が歳差のためにずれて來て了つて，30度ほど食ひ違つてゐる．つまり，ちやうど一宮ほどだけずれてゐるわけで，二千二百年昔は，太陽がアリエス座に入いると地球では春が始まつたのが，今はさうはならない．宮としてはアリエス宮に入いるときに，星座ではピスケス星座の三分の一位の所に太陽がゐる．（このやうなズレのために，占星術の方の解釋にも混亂が來る道理になるが，それには適當の調節が施されてゐるさうだ．）

このやうに地上の季節の移り變りに關係の深い星座が，人間の肉體の諸部分や器官にも直接關係があるといふ風に考へるのは當然のことだつた．さういふ占星術の考へ方が，西洋では今日の家庭の暦にも圖示されてゐる．中央に人體の裸體圖があり（一部分内臓も出てゐる），そのまはりに羊や牛や双兒，等々の圖が順々に並んでゐて，それと人體の各部との關聯が線で示してある．例へば，アリエス（牡羊）は人間の頭と顔を支配し，ゲミニ（双兒）は腕を，レオ（獅子）は心臓を，ウィルゴ（處女）は腹を支配する，といつた風になつてゐる．このやうな圖が今日でも普通に暦にのつてゐるといふ．**

十二の宮の他に十二の家（または室，House）といふのがある．天球を地平圏と子午圏とによつて四象限に分け，その各象限を更に三等分して，それら凡てで十二の空間を十二の室（家）と名づける．この十二の家が，十二の宮と同様に，人體のいろいろの部分に關聯してゐるばかりでなく，更に，一切の人間の行動や生命や事件に關係を持つてゐると信じられてゐる．それによつて，人事の一切が解釋され豫言される．生死の問題から賭博類の勝負まで豫見される．

例へば，第十二室といふのは次のやうなものを意味してゐる：秘密の仇敵，



魔女，大きな家畜（馬，牡牛，象のやうな），それから悲しみ，困苦，入牢，その他あらゆる悲運，自己破壞，また隣人を地下から傷つけたり，隣人のことを密告したりする人間，などを意味する．そして，この第十二の家は，ピスケス宮及びウェヌス（金星）によつて表徴される．土星はもともと害悪の發頭人だから，この室にゐることを非常に喜ぶ．この室は人體では足の部を

*しかし，宮は此の星座に御かまひなく，正確に30°づつに黄道を等分してゐる。（編輯）
**天界第220號の口繪を見られよ。（編輯）

支配する．色は綠色．

こんな風な十二の家は，正方形の地圖のやうに表されて，大略圖のやうな形式に表されてゐた．十二個の三角形が各々の家を意味するもので，家の間の線は尖頭と呼ばれる．現在は一般に圓形の圖形が使はれてゐるといふ．

4.

以上のやうな宮や室の精細な組織を使つて，運勢判斷をやるわけだが，それには，占ひ曆 (Horoscope, das Horoskop) とか生圖 (誕生占ひ圖 Nativity, die Nativität) とかいふものを作る．占ひ曆といふのは，或る瞬間に或る土地から見た日，月，諸遊星，十二宮などの布置を言ひ，またそれを特に或る人間の誕生について——卽ちその人の生れた瞬間，生れた土地について——作つたものを生圖といふ．

そこでいよいよ占星術者が占ひを實施するには，まづ，その被術者の『圖を立てる』(または『圖を据ゑる』)ことが必要で，それは，その人の誕生の日附けに——年，月，日，時，分まで詳しく——合致するやうに宮と遊星とを家の上へ置くことを意味する．これをやるには次のやうなものが必要になる．

占星術者は『家の表』を持つてゐる．それは十二ペイジから出來てゐて，その一ペイジづつが，十二宮のそれぞれに太陽が當つてゐる場合に對應し，その宮と次の五つの宮とが第十二から第六までの家に來てゐる所を六つの欄が示してゐる．また，その日の各時間を與へてゐる．六つの反對の宮は六つの反對の家に對してゐて，第一が第七に對し，第二が第八に對する，といつた風になつてゐる．

別に『推算圖』(Ephemeris, die Ephemeriden) があつて，これは，與へられた日附けに對して，その時の太陽の位置，卽ち太陽がどの宮に當つてゐるかを示すやうになつてゐる．

そこで，『圖を立てる』には，まづこの推算圖で太陽の位置を正しく定め，それからこの太陽の位置からして，家の表によつて凡ての家に對する宮の位置を次々と見つけ，それを注意深く『十二の家』の圖表に書き入れる．更に，これに似たやうな仕方で，家に對する凡ての遊星の相對位置を見出し，それも圖表に書き入れる．これらの位置關係は角度の關係まで細かく調べるもので，それによつて，それぞれの天體の屬性（と定められてゐるもの）に從つて，運勢判斷を行ふ．

人生のいろいろな事象と家（室）との對應關係，またそれに對する諸遊星の影響力との關係は，全く精細に廣範圍に明確に規定してあつて，人生のどんな問題でも，占へないものがないやうに出來てゐる．このやうな規定が，運勢を

豫知するばかりでなく，運勢を決定する裁決者でもあることは，支那流の十干十二支五行による占ひの場合と全く軌を一にする．また，規定の詳細なこと，その占ひの方法の面倒で，その道の專門的技術を要することなども兩者は相似てゐる．（支那流の占ひも全く占星術の一種に他ならない．）そして，この專門的技術によつて施術する所が，見かけ上，例へば現代の醫者が醫學上の知識や技術によつて患者を診斷し治療するのと同じ有樣なので，施術者も被術者も眞面目な自信と信仰とを以てそれを行ふことになる．施術者は運勢を判斷するばかりでなく，惡い運勢を避けたり輕くしたりする方法をも授ける．また，上のやうな意味で占星術は『技術的』である他に，根本が非科學的で，人間の空想を快く誘惑するので，信者は益々，無意識のうちにだまされて了ふ．未來を豫知したいといふ人間本來の切望が，本當の科學的法則に賴るよりも空想と希望と恐怖とに支配されるといふことになるのが，知能の幼稚な段階にふさわしいわけだらう．（續く）

質疑應答

問：仁王經の七難中，日月度を失ひ，時節變逆し，或は赤日出で，黑日出で，二三四五の日出で，或は日蝕して光なく，或は日輪一重，二三四五重輪現すること一の難になす也．二十八宿度を失ひ，金星，彗星，輪星，鬼星，火星，水星，風星，刁星，南斗，北斗，五鎭の大星．一切の國主星，三公星，百官星，是の如き諸星各々變現すること二の難となす也．

以上の天文學上の御解說を煩はすものである．(T. M. 生)

答：どうも之は宗教書中の文で，理學書ではないため，正確に，ありのまゝの事實を述べたものと考へることは出來ません．只，人が昔時から天地宇宙の諸現象を見て，不可思議と思つたもの，又は，想像上から，こんなことも在りそうだと思ふことを擧げたのでせう．勿論，皆，肉眼で天象を見た經驗と，其の錯覺や，誤認から來たものです．例へば“日月度を失ひ”といふのも，實は決して太陽や月が軌道から脫線するわけはないのですから，むしろ之れは天氣の亂れたときに日月の光輝が變化することを言つたのでせう．“時節變逆し”も，一重二重乃至五重の日輪も皆氣象學上の變現です．“赤日”は日出日沒の景色，“黑日”も天氣の惡い時の異象，又は日蝕です．“二十八宿度を失ひ”も前述と同樣．又，金星以下の星々の名も，有名無名いろ々々の名で，中には，天界234號373頁の索引で知られるものもありますが，しかし，必ずしも正確な星を指すものではありません．況んや“諸星各々變現する”など言ふのは，決して今の變星などのことを言ふのではなくて，空模樣の亂れてゐるときに，雲霧のために星が怪しく見えかくれするのを言ふものに違ひありません．(Y)